高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.3

●写真提供／汲田栄功氏

リレー随筆③　わかれ――坪井百合子

母（小山いと子）が亡くなって十年になります。その時は、母自身も県立文学館に展示して頂くようになるとは、夢にも思っていなかったと思います。親子といえども、六十年の間にはさまざまなことがありました。

平成元年七月十三日、母の八十八の誕生日のお祝に、花かごなどのお祝の品を持って東京都下青梅市の病院に行きました。一年半ほど前から医師の助言もあり、独居ももう限界ということで入院させたところでした。病室に入って行くと、

「あら、百合子来たの、今日は軽井沢に行く日でしょう。」

といいました。今までの経験からさからわないで会話をつづけているうちに、窓の外にねむの大木があってピンクの夢のような美しい花が咲いていました。

「ねむの木　ねむの木　ねやしゃんせ。お鐘がなったら　おきしゃんせ。」

幼いころ母がよく語りかけてくれた竹久夢二の詩が、自然に出て来ました。

母が、すぐに応じました。

そこで、

「ひたひたと……」というと、

「さざなみ立ちて　大空の
はてよりはてに　引く秋の雲」

と、すぐ唱和しました。

これは、母の二十歳代のころの短歌で橋田東声氏主宰の「覇王樹」に掲載されていたものです。当時、福岡で私たちの育児に追われながら、文学への志おさえがたく、新聞に投稿していた短歌がみとめられて、「覇王樹」に属するようになったのです。

昭和二十年三月、東京大空襲で上野で焼け出され、父の郷里の新潟に疎開したのですが、そこの蔵の中に九州から福山に父の転勤のために送らせた荷物があり、本や雑誌もありました。私が蔵の中で「覇王樹」のバックナンバーを見つけ、その中の何首かの歌の中から一番よいと思って母に教えたのでした。最後に軽井沢へ行った時、近くの霊場の池のほとりを二人で散歩していました。静かな水面（みのも）がひたひたとさざなみ立って来た時、思わず二人でこの歌を唱和しました。

そのあと、病室で二人で「浜辺の歌」と「ローレライ」を歌いました。母も忘れたところもなく、それは楽しいひとときでした。これなら普通の生活もできるかもしれないと思いながら、「また来るわね。」と、病室を辞しました。

十日後の夜、病院からすぐ来るようにとの電話を受けた時は、信じられませんでした。臨終にやっと間に合いました。

昨秋の文学館オープンの記念講演会のアトラクションで、安藤千織さんのフルートで「浜辺の歌」を聞いた時は、万感こみ上げて来て涙がとまりませんでした。

六十年間の愛も憎しみもかなしみも洗い流してくれたあの日の歌と音楽、「わかれ」とは、この世に心を残すことなく見送ることではないのでしょうか。

（小山いと子　三女）

高知県立文学館

◆次回企画展によせて◆

智恵子抄展

会期―2月6日(土)～3月7日(日)

光太郎に出会った頃の智恵子

詩人であり、彫刻家であった高村光太郎（明治16年～昭和31年）の詩集『智恵子抄』は、昭和16年に刊行されて以来、度々版を重ねながら、いまなお多くの人々に読み続けられています。

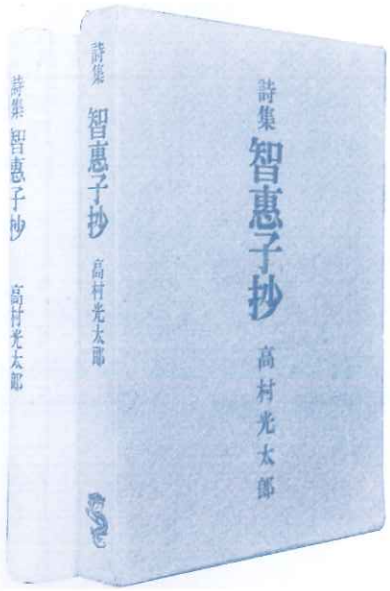
『智恵子抄』で唱われた高村智恵子（旧姓長沼）は、明治19年福島県安達郡の造り酒屋の家に生まれました。幼い頃より成績優秀で、高等女学校卒業後には単身上京し、日本女子大学に入学します。

物静かで、語尾が消え入るような話し方だったという智恵子ですが、反面、当時最先端のものであった自転車を誰よりも早く乗りこなすなどし、とても目立つ存在だったようです。智恵子の一年先輩で、のちに女性解放運動家として知られる平塚らいてうも、智恵子のテニスについて書いています。「とにかくこのひとの打ち込む球は、まったく見かけによらない、はげしい、強い球で、ネットすれすれにとんでくるので悩まされました。あんな内気なひと――まるで骨なし人形のようなおとなしい、しずかなひとの、どこからあれほどの力がでるものか、それが私には不思議なのでした」（昭和34年「智恵子さんの印象」）。

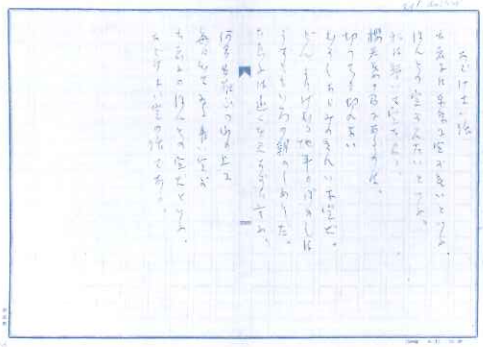
智恵子はその外面からは想像が出来ないような、強い意志とまっすぐなまなざしの持ち主でした。卒業後、智恵子はまだ珍しかった女流画家の道を志し、反対する両親を説得して東京に残り、画塾に通って勉強を続けます。明治44年、平塚らいてうが雑誌『青鞜』を創刊した際には、協力者として参加します。有名な創刊号の表紙を描いたのも、智恵子だったのです。その頃は女性解放運動などに対する世間の目は冷たく、智恵子も「新しい女」などと呼ばれて注目され、活躍を評価される一方、新聞などにでたらめな中傷記事を書かれたりもしました。しかし智恵子はただ人として自らの信じた道を進むのみでした。「『女であるゆえに』ということは、私の魂に係りがありません。女なることを思うよりは、生活の原動はもっと根源にあって、女であるということを私は常に忘れています」（大正5年5月号『婦人週報』）と智恵子はいうのです。

そんな智恵子が光太郎と出逢うのは、明治44年のことです。その頃光太郎はパリやロンドンで最先端の芸術に触れて帰って来たばかりでした。帰国した光太郎は、旧態依然の日本の芸術界に孤独な闘いを挑んでいました。高知県出身の画家・山脇信徳が発表した「停車場の朝」をめぐって巻き起こっていた美術論争に、信徳擁護の立場の光太郎は「緑色の

父光雲の胸像の前に立つ光太郎



「智恵子抄」龍星閣版（昭和16年）



光太郎詩稿「あどけない話」昭和３年５月

太陽」（明治43年『スバル』）という文を書きます。「人が『緑色の太陽』を画いても此を非なりとしない」と言ったこの評論は、日本近代美術史上に残るものでしたが、いくら論じても実際は美術界に大きな変革が起こるわけでもなく、光太郎はどうしようもない焦燥感によってデカダンの底に堕ちていました。毎晩酒を飲み歩く荒れた生活を送っていた光太郎の前に、智恵子はまさに「奇蹟のやうに」現れます。「永い間精神が探し求めていた女性がこの女性だと思うようになり、ぱっと人生の窓が開いた。私は急に変った。今まで何であんなに汚く遊んでいたのだろうと感じ出し、昨日までのやけ酒や、遊びがまるで色あせてしまい、ただこの女性の清新な息吹に触れることだけが喜となった」（昭和29年「父との関係」）。

大正3年、二人は芸術への高い理想を掲げ、東京駒込のアトリエで共同生活を始めます。生活は貧窮しましたが、二人は理想を捨てませんでした。光太郎のほうは智恵子という理解者を得たことで次々と新しい作品を発表していきますが、智恵子はどうしても油絵具と、その色彩表現を十分克服することができませんでした。あれほど志した洋画に、智恵子は絶望し、深く悲しみます。そしてもともと体の弱かった智恵子は、父の死や実家の破産、弟の不始末など様々な心労が重なった末、とうとう精神を病み、昭和7年、自宅2階のアトリエでアダリン自殺を計るのです。隣室には買ってきたばかりの果物籠が静物風に配置され、そばの画架には新しい画布がかけられてありました。光太郎はそれを見て胸をつかれ、慟哭したといいます。

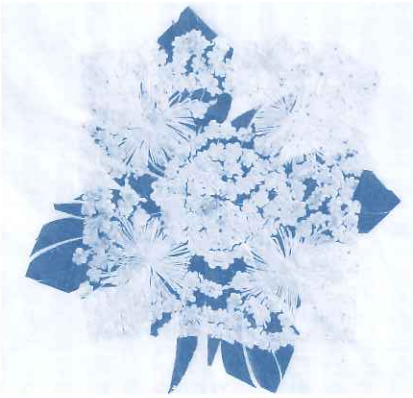
光太郎は智恵子の看病に生活の全てを捧げますが、智恵子の正気が戻ることはありませんでした。昭和10年自宅療養が不可能なほど智恵子の病状は悪化し、ゼームス坂病院に入院。やがて智恵子はマニキュア用のちいさな鋏で色紙を切り抜く紙絵細工を始めます。身の回りの小物、光太郎が見舞いに届けるくだものや花、魚などから、抽象的な形。あらゆるものを智恵子は紙絵で表現しました。

光太郎は智恵子が作った紙絵を見て驚きました。油絵ではどうしても克服できなかった色彩表現がそこには見事に完成されていたからでした。「一枚の紙の鼠色が高貴な銀灰色ともなるのである。紙を切る鋏の使い方と切った紙を台紙に張る技術とには殆ど人間業でないものがある。極度のメチエである」（「みちのく便り」）と光太郎はその作品を高く評価しました。智恵子の才能はここにいたってようやく開花したのでした。昭和13年に52歳で亡くなる直前の、わずか1年あまりで、智恵子は千点を超える見事な紙絵を作りました。

今回の特別展ではこの智恵子の紙絵を前期後期あわせて約100点ご紹介します。近年ますます高い評価を受けつつあるこれらの紙絵は、芸術作品であると同時に、智恵子という一人の女性の詩でもあります。ゆっくりと向かい合い、智恵子の声に耳をすましてみて頂きたいと思います。

今回は、紙絵とあわせ、光太郎の彫刻作品や詩原稿、書などの貴重資料のほか、高知との意外な係わりを示す資料などもご紹介します。二人の稀有な愛の世界と生涯を、この機会により深く味わっていただければ幸いです。

（学芸員　野中佐知子）



智恵子紙絵「白い小花」

光太郎書「詩とは不可避なり」

光太郎「手」ブロンズ

【主な展示資料】

■智恵子紙絵作品約100点
※紙絵作品は前期（～2/21）、後期（2/23～）で一部展示入れ替えを行います。
■光太郎彫刻作品：裸婦座像、手など
■光太郎原稿：「あの頃」「メトロポオル」「元素智恵子」など
■光太郎書作品
■土佐とのゆかり資料：山脇信徳宛光太郎書簡、岡本弥太詩碑「白牡丹図」（光太郎筆）関係書簡、寺田寅彦との関係資料

【関連催し物】

※いずれも文学館1階ホールにて
※入場無料
◆高村光太郎作品朗読会
日時／2月6日（土）
13時30分～15時
◆特別記念講演会
日時／2月14日（日）
14時～16時
演題／「光太郎・智恵子
―鮮烈な生の軌跡―」
講師／北川太一氏（文芸評論家）

学芸員メモ

「ヴィジョネール・片山敏彦の世界」展を終えて

「ヴィジョネール・片山敏彦の世界展」会場風景

片山敏彦生誕百年と高知県立文学館開館一周年を記念して、高知より発信した県立文学館自主企画「ヴィジョネール・片山敏彦の世界」展は十二月十三日をもって幕を閉じた。

期間中は、大勢とは言えないけれども「片山敏彦」を偲ぶ世代の方々や、彼の作品に興味を持った若い方たちが途絶えることなく、文学館に足を運んでくださり、熱心に「片山敏彦の世界」をご鑑賞くださった。また、企画展終盤をむかえ客足が増えていったことは、私達にとって非常に励みになった。

ところで今年は、当館の企画展の他でも、さまざまなかたちでの彼の業績の顕彰が行われた。五月には黒の会発行の雑誌「同時代」が「片山敏彦生誕百年」特集号を組み、十月には、みすず書房から「片山敏彦の世界―生涯とその仕事」を出版、また、日本図書センターから「片山敏彦著作集」全十巻が復刻された。さらに、彼の仕事や生涯を主題とする講演会も高知や東京などで開催。文芸評論家の加藤周一氏、早稲田大学文学部教授の清水茂氏、日本大学教授の長谷川勉氏といった方々の執筆により、静かなブームが広がっていった。

今回の企画展においては、幸いなことに、敏彦の遺族が東京で「片山敏彦文庫」を開館しており、多くの貴重な資料を所蔵されていた。そして今回展示した資料の殆どはこの「片山敏彦文庫」からお借りすることができた。

「片山敏彦」という名前をご存知の方は多いのだが、彼の死後紹介される機会は殆どなかった。しかし、清水茂氏が一九八八年小沢書店より『地下の聖堂、詩人片山敏彦』、一九八九年同書店より『詩と散文』を出版。片山敏彦の仕事の「核」となっている詩を通して詩人「片山敏彦」を紹介し続けていたが、敏彦の著作本は殆どが絶版になっていた。その後、一九九三年「片山敏彦文庫」開館にあたり、年一回「片山敏彦文庫だより」を発行、「片山敏彦文庫の会」が発足した。現在、会員は約二〇〇名とお伺いしている。この方達に支えられ、今回の企画展は実現したといえよう。

一般に敏彦の仕事として知られているのは翻訳であり、県内でも翻訳者「片山敏彦」を知っている人は比較的多いが、その他の仕事については、意外に知られていなかった。

早稲田大学教授　清水茂氏による記念講演
演題「片山敏彦の<ふるさと>」

そこで今回の企画展では、「片山敏彦」再顕彰という意味において、敏彦の生涯を追っていく展示となった。私たちは、彼の生涯を追いながら次のテーマを設定し、それらのテーマを中心に展示した。家系の樹、青春の彷徨、ロマン・ロランとの出会い、ヨーロッパ遊学、帰国から終戦まで、第二次世界大戦後、それに土佐と片山敏彦、敏彦の絵画の八部構成である。これらの中から、片山敏彦の全体像を浮かび上がらせ、彼の仕事の多様性や魅力を伝えようとした。

詩人、画家、エッセイスト、評論家、ゲーテ、ヘッセ、ロラン、タゴールといった西洋・東洋の文学者の翻訳者として、彼の仕事の多様性には人を驚かせるものがある。六十三年という生涯を通して、彼の知的好奇心は、個人的な嗜好を超えて、不断に新たな領域へと拡がり、最先端の芸術や詩的営みへと傾いていった。彼の仕事は他方面にわたるが、決して拡散しているのではない。その営みは絶えず中心に向かって流れ込んでおり、その中心にあるのは、彼の醇厚な魂であり、その仕事の核をなしているのは、「詩」といえよう。

敏彦は、詩についてこう書いている。「詩の純粋性は、知性の純粋性の方向にあるよりも祈りとしての純粋性の方向にある」と。清水教授は、敏彦にとっての「詩」について次のように分析している。「彼が詩は祈りだと考えるとき、彼の目に映る世界とは、単なる知的作業の提唱として、諸概念の盲目によって覆いつくされ、客体化されたものでもなければ、また、個人的社会的な様々な欲望の対象として断片化されたものでもなく、それ自体全一のものとして視られ、受容されているのである。…」全一のものとして彼の「詩」を捉えるとき、はじめて「詩人片山敏彦」に歩み寄れるのかも知れない。

今回の企画展の準備をすすめていく中で、非常に興味をひかれた分野が浮かび上がってきた。限りあるスペースの為、今回の展示では取り上げなかったが、片山敏彦の比較文学、しいては、比較文化についての研究である。敏彦は、一九四七年（昭和二二年）四九歳の時、東京大学ドイツ文学科で一年間比較文学「近代独仏文学の交流」について講義している。また、彼は特に芸術の世界における〈照応〉について、もっとも多く書き残している。さらに文学や思想や、生活倫理の問題や個人の経験に関連しても述べており、その生活と思想とを併せた文化の本質―さまざまな文化の現実的な性格、さまざまな文化の理念的特質―を認識するための、やや偶然的ではあるが、不可欠の要具（認識であり、体験であり、理解の手段）へと意義を拡大している、つまり比較芸術論、比較文学論にとどまらず比較文化論へ歩みをすすめているのである。彼の作品の数々を通して、今一度この点を、深く掘り下げていってみたいと思っている。

岩淵龍太郎氏のヴァイオリンと田渕千代子氏のピアノ演奏（ベートーヴェン作曲・スプリングソナタ他）

戦争の中の激動する時代を生きた片山敏彦。彼の友人たちが戦争へと傾倒して行く中、彼は外部と内部との間に張り渡した精神世界を仲立ちとして耐え通した。外には吹きすさぶ嵐、中にはたゆとう醇厚な魂、その魂が軟らかに燃え続けるために、彼は身を囲む精神の世界から絶え間なく生気あるイマージュを吸収しなくてはならなかった。文学と芸術の世界は片山敏彦の魂にとって果てしなく生を肥やすイマージュの享受であり、イマージュは生きている力として彼の内部で自己再生の構想力に変化していったのである。

音楽や美術であろうと、詩作や論考であろうと、これらの現体験は感動からの出発である。イマージュに転生の力を与え、享受は変身して想像の源泉となる。彼は自らの魂の柔軟な資質、天性の感受性と高い趣味判断に支えられた基礎体験を日常生活に定着させ、その体験のくりかえしにより、美的で同時に論理的な緊張を生活の上へ張り詰めるにいたった。

片山敏彦の一高時代の教え子には、中村真一郎、白井健三郎、加藤周一といった著名人がいるが、加藤周一は旧制一高（昭和十四年理乙卒）同窓会誌「向陵」（平成十年十月発行）に片山敏彦の思い出をこう書いている。

「‥われわれにとって、教室での片山敏彦はドイツ語教師であった。自宅での片山敏彦は軍国日本の真中に開かれた詩的ヨーロッパへの唯一のそして、最初の窓であった。片山敏彦は孤立していた。国外へ出ることができず、軍国日本の内側での精神的な亡命を強いられていたのである。その立場からは、軍国主義の現実をわずかなりとも動かすことは出来ないであろう。しかし、軍国主義もまた詩人の内部に何らかの影響を及ぼすことはできなかった。‥」

当時の状況や時勢に左右されない、片山の確固たる姿勢が手に取るように感じられる文面である。

戦後五十三年を迎えた今日の日本。「なぜ、いま片山敏彦か」静かなブームの中、今一度皆さんと共に考える機会を与えていただき心より感謝している。

最後に、本企画展開催に際し、ご教授くださった永田和子氏、ご遺族の朝長梨枝子氏をはじめご協力いただいた多くの方々に心より御礼申し上げます。

（学芸員　津田加須子）

ヴァイオリニストの岩淵龍太郎氏とノンフィクション作家青木やよひ氏の対談「片山敏彦を偲んで…」

閲覧室から

『日本方言詩集』

川崎　洋　編

かなり以前のことであるが、NHKで「国語元年」というドラマを見た。明治初年の標準語制定にまつわる喜劇で川谷拓三演じる主人公の文部省官僚と会津、江戸下町、鹿児島…出身の家族、使用人、居候が我がお国言葉こそ標準語にと大騒ぎを繰り広げる。お国言葉が飛び交い、紛れもない和製であるにも関わらず画面に字幕スーパーが流れていた。幕藩体制が崩壊し初めて「日本人」という国家意識が芽生えた時代の混沌を描いていた。しかし、今やインターネットで瞬時にして世界と繋がるご時世である。その土地の歴史と風土に根ざした方言は情報化社会の片隅に追いやられようとしている。本書は片岡文雄氏の「山鬼」をはじめとする高知県の方言詩四編を含む九十一編を全国から収録し、詩人の肉声も同時に収録。方言が持つその土地とそこに生きる人間の温もりとそれらに対する詩人の温かいまなざしを感じ取ることができる。さらに言えば、著者があとがきで述べているように目で活字を追うより声に出して味わいたい一冊である。

（思潮社、1998・7・1発行、2,800円十税）

県内同人誌紹介

南方手帖

昭和三十九年秋、坂本稔個人誌として創刊、3号より題字を竹内蒼空、表紙版画を日和崎尊夫が担当。詩を中心として小説、エッセー等を掲載。季刊文芸誌として歩み始める。詩人の吉本青司、作家の山川禎彦、牧川史郎らの文芸作品の外、高崎元尚ら美術家の作品や意見も掲載し、多角的な展開を試みる。

一時期休刊の後、平成八年一月に復刊、詩人のほか写真家、版画家、音楽家らの協力を得て、小粒ながら総合的文化雑誌としての歩みを続けている。ともすれば、偏狭なグループ意識や独善性にまみれやすい、いわゆる《同人誌》からの脱皮を目指し、詩・短歌・随筆作品掲載の外、流派を問わず、詩人、画家の紹介コーナーや読者投稿欄も設置、新しい世紀を脱んでの総合的な地域文化の在り方を探っている。創刊三十四年、現在57号。執筆メンバー十二名。編集発行・坂本稔。

（坂本稔）

連絡先　〒781―2128
高知県吾川郡伊野町波川1622南方荘
☎・FAX　0888―92―1177

土佐文学さんぽ 2

田中英光「櫻」

土佐山村菖蒲の田中英光実家・岩崎家

山高く水清いこの土地で、父が燃やした世俗的な野心は、かへってお初さんの忍従さに負けた氣さへした。いや、父ばかりではなく、當時の地方の新青年たちは、なにを追つて東京市に出ていき、東京であくせく鬪つてきたのであらう。政治、學問、藝術、それ等純粹なるべきものの、反つて不純な姿を、ぼくはお初さんの無言實踐十年の婦道に較べてみた。お初さんの生き方ほど、清潔で緩みのないものをぼくは知らなかつた。金の爲でも名の爲でも欲情の爲でもなく、お初さんは日本の血と土地、そのまゝに生きてきた。

田中英光（1912～1949）がはじめて父祖の地、土佐山村菖蒲を訪れたのは、昭和10年5月であった。徴兵検査のための一時の帰郷であったが、その滞在の間、英光を人間的に蘇生さしめるほどの感動を与えたのは、心静める故里の山河ではなく、凄惨ともいえる人間の光景――座敷牢生活を余儀なくされた従兄秀磨を甲斐がいしく世話する妻お初さんの〝忍従の美しさ〟であった。世俗的出世を果たした父鏡川、共産主義思想にかぶれた兄そして自分をもあっさりと流し去ってしまうお初さんの〝清潔な緩みのない生き方〟に岩崎家の燈明の灯を絶やさない人間、山村の伝統を守る人間、さらに人間の原型〝母〟なるものを見たのである。秀磨の無残な姿は、岩崎家の男たちに他ならず、それは幹も虚ろになった樹齢80年の櫻に象徴されている。舞台となった鏡川の支流、菖蒲川はさながら、英光のもつ清冽な魂と、お初さんの中に流れる〝母〟なるものとの合流から新たに生まれた心の清流のようでもある。

お初さんの生きた土佐山村へ

急峻な山々が90％を占めるという土佐山村の人口は約1300人。主な生産物は筍、茶、生姜、茗荷で、日曜市の出店の名札に「土佐山村○○○」をよく見かける。産物の消費地は今も昔も、北山に部厚く遮られた高知市。距離にして20キロ。それだけに近くて遠いという隔靴掻痒の感も深かったらしく、村史に、私財を抛って円行寺越え道路を造った人物と頌徳碑が紹介されている。

道といえば、こちらうかつにも本宮町、鏡村川口経由で来てしまい、鏡川の清流沿いという余録があったとはいえ、ところどころ工事中、頑としてバックしないダンプカーに悩まされて、50分も要した始末。昼食に寄った喫茶店「ちゃろうむ」のママさんに「それがたまりますもんか。正蓮寺回りならたったの20分」と笑われてしまった。「タナカヒデミツ…さあ、知りませんぞね…」の言葉を後にして、車で5分もかからないという菖蒲へ。

× ×

岩崎家はかなりの高台にあった。急激にせりあがったような杉山が、南方の視界をふさいでいる。眼下の菖蒲川は雑木におおわれてみえず、せせらぎの音だけを、かすかに届けてくる。

お初さんの本名は糸治。6年前、91歳で他界したと教えてくれたのは、糸治さんの長男豊次郎さんの妻花美さん（75歳）。「長生きしましたぞね。ええ往生やったし…。規律正しいひとで、なかなかの頑張り屋さんやった。それに、器量も良かった」と今も姑をほめる。英光の眼に狂いはなかったのだ。「うちの孫娘も英光さんのことはちったあ知っちょって、勉強せないかん言いよります」。お初さんの血はこの山里にひっそりと流れつづけていたのである。

帰り際に、祖父英生の手で植えられた桜のことをきいてみた。「戦争が終わるちょっと前に、伐りましたぞね。場所は、あそこ…」と指さす方をみると、大工が2、3人出たり入ったりしている改築中の古屋があった。

（フリー編集者　国則三雄志）

見どころ＝●健康交流センター「とさやま」●土佐寒蘭センター●オーベルジュ土佐山●山獄社趾●工石山

交　通＝高知県交通バス、堺町発1日4便

資料受贈報告

（平成十年八月～平成十年十一月）

敬称略

▼**地主愛子**（濱本浩妹）・濱本利三郎資料（短冊二点、自筆俳句日記、書簡、写真、新聞切抜き他）▼**橋詰緑**　濱本浩短冊二点▼**梯美穂**・作者不詳「田中貢太郎油彩肖像画」一点▼**濱本澄夫**（濱本浩長男）・濱本浩著作『十二階下の少年達』他初版本、初出雑誌一三一点▼**藤本綾子**・萱野笛子著『詩集・青の自画像』他土佐の近現代詩歌集他刊本六十点▼**国見純生**・自著『歌集・懐南集』他刊本八点▼**森下時男**（森下雨村遺族）・『東天紅・明治新聞雑誌文庫所蔵目録』他刊本二点▼**小松弘愛**・自著『詩集・平鍬を肩にした少年』他刊本七点▼**篠原義彦**・自著『源氏物語の世界』他刊本二点▼**岡崎一**・自著「中江兆民と英米文学（一）」（東京都立短大研究論集創刊号抜刷）他刊本一点▼**西岡寿美子**・編『'98高知詩集』▼**近澤杉車**・自著『句集・杉の実』▼**前川浩一**・自著『岡上菊榮の時代』他▼**岡崎和明**・岡崎輝江著『岡崎輝江歌集・秋はそこまで』▼**長尾軫**・自著『愛と哀と埃―長尾軫詩集―』▼**真辺博章**・訳『続オクタビオ・パス詩集』▼**坂東充**・自著『遠祖を探る―佐川・坂東一族の伝承と事跡―』▼**土屋文明記念文学館**・編　図録『群馬の作家たち』他視聴覚資料一点▼**同志社大学**・編刊『新島襄―その時代と生涯―』▼**高知市文化振興事業団**・編『図録・高知市史　考古～幕末・維新篇』▼**高知工業高校文芸部**・編刊『詩選集・工業の詩人たち』

この他、多くの方々からご寄贈頂きました。紙面を借りて御礼申し上げます。

◆◆◆文学館日誌 1998年9月～11月◆◆◆

9月

◆5日 大阪市教育委員の渡辺司郎氏夫妻来館。土佐日記講座第五回◆6日 三二企画「田宮虎彦・作品誕生の過程を探る」関連企画、映画「雲がちぎれる時」上映会。原作は田宮虎彦「赤い椿の花」。榊原忠彦氏、田辺浩三氏らの解説あり。◆8日 「俳句展―近代俳人と土佐の作家たち―」高知県俳句連盟と共催で13日まで。同日、日本大学教授長谷川努氏来館◆12日 第一回文学カレッジ開講 片岡文雄講師による「土佐の風土と文学」。◆17日 小山いと子三女坪井百合子氏来館。◆19日 土佐日記講座最終回。◆20日 映画「雲がちぎれる時」上映会。昭和36年高知ロケ当時県観光課長として尽力された乾常美氏や、五所平之助監督と親交、映画化にも一役買った元高知松竹支配人矢野美佐穂さん他大勢のファンが観覧。上映後も思い出話に花咲く。同日、佐々木正夫氏他、琴平町文化協会の方々来館。◆25日 前夜来の豪雨で交通マヒ。幸い資料等に被害無し。◆29日 横山隆一氏、二男隆二氏のお世話により東京の稲垣敏行氏より寄贈いただいた「一絃琴」届く。一絃琴の名演奏者、稲垣積代氏も晩年愛用の品。

企画展示室で。左から、北澤氏、永田先生、清水先生ご夫妻、橋田館長、青木氏。(1998.10.31)

10月

◆9日 片山敏彦長女、朝長梨枝子氏来館。翌日も。◆10日「ヴィジョネール片山敏彦の世界」展、開幕。企画展準備に多大のご協力をいただいた永田和子先生の解説あり。同日、文学カレッジ、片岡文雄講師による『土佐の三詩人―片山・岡本・大江について』。◆14日 香我美町の皆さん岡本弥太コーナーも含め見学に来館。◆25日 伊予三島市立図書館一行来館。◆31日 片山敏彦生誕百年及び高知県立文学館開館一周年記念講演会を県民文化ホール（グリーン）で開催。早稲田大学教授清水茂氏による『片山敏彦の〈ふるさと〉』と題する記念講演とノンフィクション作家青木やよい氏とヴァイオリニスト岩淵龍太郎氏による「対談とヴァイオリンのつどい」。片山敏彦の偉大な業績とその魅力で聴衆を魅了。はるばる東京からおいでた早大生も。なお、同日午前には永田先生ほか清水先生ご夫妻、青木先生ご夫妻来館。企画展及び常設展をじっくりとご観覧下さった。

11月

朗読コンクール本選
(11月8日、文学館ホール)

◆1日 片山敏彦と父親同士が従兄弟との安岡隆一・由貴夫妻来館。同日、田中英光研究の同志社大学教授田中励儀氏来館。◆3日 片山展でドイツ語の邦訳でご協力下さった高知大学教授瀬戸武彦氏夫妻来館。同日 山本秀樹氏遺族岩井氏、横山氏ら横浜市より来館。◆4日 京都新聞社社長坂上守男氏ほか「春秋会」の方々来館。◆6日 横山隆一氏製作・寄贈の「久米正雄ブロンズ像」を本吉勝美氏が届けて下さる。「土佐ゆかりの作家」コーナーに新たに展示。長い親交のあった久米氏が昭和二七年三月急逝の夜、久米氏を偲びながら造った像の原型をもとに五体再製作したものの一体。第一号のお披露目となる。同日 河北新報社社主、一力一男氏ほか「春秋会」の方々来館。同日千歳市教育長工藤文夫氏他五名来館。◆7日 文学カレッジ、猪野睦講師による「中江兆民の思想と文学」◆8日 第一回児童生徒文学作品朗読コンクール本選。「平家物語」を朗読した土佐清水市立貝ノ川中学三年生の小林里美さん金賞に輝く。特別審査員田島征彦氏による記念講演「お子さまランチ」も好評。◆11日 新屋敷の濱田登美氏より「田中貢太郎俳句襖額」ほか受贈。◆13日 香川県立図書館一行来館。同日 四国各県新聞社文化部長来館。◆15日 吉備路文学館来館。◆17日 大方町教育委員会一行来館。同日津野輔猷氏（津野松生氏長男）来館。田中貢太郎、田岡嶺雲ほかの著書多数受贈。◆20日 本山町で全国文学館連絡協議会総務情報部会開催。当文学館より橋田館長と学芸課の北川・津田・野中が参加。同日 讃岐文学館の永田館長ご夫妻来館。馬場孤蝶の書簡額受贈。また妻鳥季男氏他も来館。「前田夕暮」他短歌資料を受贈。◆21日 中村稔氏、紅野敏郎氏ほか全国文学館連絡協議会の一行約三十名が当館を視察見学。◆22日 逸翁美術館館長岡田彰子氏来館。◆26日 土佐市の上田幸子様（上田秋夫夫人）ご逝去。28日ご葬儀。◆28日 石川県の中谷宇吉郎雪の科学館の次長、中出小夜子氏来館。◆29日 片山敏彦展に「敏彦十歳七ケ月」の「布袋図」をご出品下さった織田様が東京のお孫さんとともに来館。

「土佐ゆかりの作家」コーナーに新たに展示された久米正雄ブロンズ像
（製作・寄贈 横山隆一氏）

寄贈資料から

「書を読む田中貢太郎」

（63×50×2.2cm油彩 キャンバス）

大町桂月、田岡嶺雲らに師事し、井伏鱒二、田岡典夫、浜本浩らを育てた田中貢太郎は明治十三年、仁井田に生まれ昭和十六年春、郷里で亡くなった土佐の誇る文学者である。この絵は、東京在住の貢太郎の二女、梯（かけはし）美穂さんより昨夏ご寄贈いただいた一品。

前頭部はいくらか寂しくなってはいるが、まだ頭髪もそれなりに豊かであること、晩年は殆ど和服であったこと、などから推測すると製作時期は大正中期、貢太郎四十歳前後のものか。

さて作者についてであるが、彼の風貌を描いた画家は石川寅治、高橋白日子など何人かいるが、この肖像画には、どこにもサインが無く、長く所蔵された美穂さんもご存知でない。

貢太郎の大ヒット作「旋風時代」の挿絵を担当した河野通勢も若い頃は岸田劉生門下で油絵も描いているし、同じく劉生門下であった岡崎精郎とのつながりも貢太郎にはあるし、と思いめぐらしてみるのだが…。

この絵について、なにか手がかりでもご存知の方がいらっしゃいましたらお教え下さい。

高知県立文学館ニュース　第三号　平成十一年一月一日発行

〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八八―二二―〇二二一　FAX〇八八八―七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

1999年

1～3月

	1月――January	2月――February	3月――March
常設展示	**ミニ企画展**　［土佐の一絃琴――一絃の琴に魅せられた人々――］――1/24(日)まで 稲垣積代氏の一絃琴が寄贈されたのを機会に、秋沢久寿栄氏の一絃琴もあわせて展示紹介。 **関連催し物**　「土佐一絃琴と文学―演奏と朗読の集い―」＊日時/1月15日(金・祝日)14:00～16:00　＊場所/文学館1Fホール　＊入場無料 演奏：近森律子（「須磨」「漁火」「土佐の海」）、朗読：松田光代（宮尾登美子「一絃の琴」田宮虎彦「土佐日記」他抜粋）		
催しもの	**特別事業** 「こどもと絵本の100年展」―1/17(日)まで 明治、大正、昭和のこどもの絵本を中心に展示しながら、100年のこどもの生活と本の関わりを探ります。 ＊文学館2階企画展示室にて ＊入場無料 ＊主催／高知こどもの文化応援隊 平成10年度高知芸術祭特別協賛行事 **文学カレッジ** 土佐文学への理解をさらにふかめていただけるよう、毎月1回の連続講座を開催しています。 ※いずれも13:30～15:00 ※文学館1Fホールにて 注）この講座の募集はすでに締め切っております。 ●第5回文学カレッジ 「タカクラテル　人と文学」 ＊1月9日(土) ＊講師/猪野睦氏(詩人)	**第3回土佐菜の花忌記念映画会** ＜'70東宝作品「幕末」上映会＞ ＊日時：2月11日(木・祝) 12日(金) 午後1時10分～3時半 ＊場所：文学館1Fホール ＊入場無料、定員100名（各日） ハガキにて住所・氏名・電話番号・観覧希望日をご記入の上1月23日までにお申し込み下さい。余席があれば当日入場も可。 ※「幕末」について 司馬遼太郎原作「竜馬がゆく」を基に伊藤大輔が映画化したもの。中村錦之助、吉永小百合、三船敏郎、仲代達矢らが出演。 **文学カレッジ** ●第6回文学カレッジ 「鹿持雅澄の学問と芸術」 ＊2月13日(土) ＊講師/浜田清次氏（国文学者） 	 **文学カレッジ** ●第7回文学カレッジ 「寺田寅彦　科学と文学」 ＊3月13日(土) ＊講師/上田壽氏（高知医科大学名誉教授）
特別企画展	**冬季特別展――［智恵子抄展］** **2月6日(土)～3月7日(日)** **関連催し物**　いずれも文学館1Fホールにて。入場無料。参加自由。 ●高村光太郎作品朗読会 ＊日時/2月6日(土)13:30～15:00 ●特別記念講演会「光太郎・智恵子―鮮烈な生の軌跡―」 ＊日時/2月14日(日)14:00～16:00 ＊講師/北川太一氏(文芸評論家)		

【休館日】1月――1，4，11，18，25　　2月――1，8，15，22　　3月――1，8，15，23，29

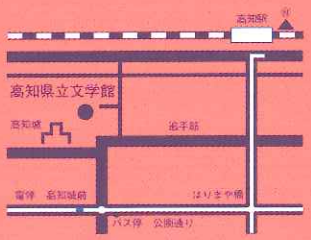
春の特別展予告　「司馬遼太郎展―19世紀の青春群像―」　5月1日(土)～5月30日(日)

素顔の司馬遼太郎氏を紹介するとともに産経新聞に連載された司馬の3作品「竜馬がゆく」「坂の上の雲」「菜の花の沖」に描かれた青春群像に日本人の知恵と勇気を探る。

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)
休館日	毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日) 年末年始(12月26日～1月1日)
観覧料	一般300円 特別企画展のあるときは、料金が変わります。 20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県長寿手帳所持者及び身体障害者手帳(1・2級)療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●ＪＲ高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩4分
●バス停公園通り下車北へ徒歩4分

高知県立
文学館

高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　0888・22・0231
FAX　0888・71・7857
〒780-0850